あるモダン・ガールの昭和初期（Ⅰ）
—婦人記者からドレス・メーカーへ—

平　井　一　弘

序

マス・ケート

本稿にいう「モダン・ガール」とは、本名を平井満壽、筆名を、結婚前には平井満壽子、夫ポール・ケートと結婚後はマス・ケートとした日本人女性のことである。本稿では基本的に「マス」と呼ぶ。右の写真はマス晩年、恐らく50歳頃のものである。

マスは本稿の筆者の伯母である。父の姉に当たる。身内に伝わる話としては、マスは、大正中頃に、当時まだ珍しい婦人記者となり、後の昭和初期に、これまた珍しい国際結婚をし、これもまた当時としては珍しい洋裁のデザイナーとなり、戦前と戦後にファッション界で活躍をした、というものである。

婦人記者といっても、日本最初の婦人記者といわれる明治期の羽仁もと子、大正初期の読売新聞（後にマスがそこで働いた）の「婦人付録」の編集主任の小橋三四子、また社会運動家でもあった市川房江や神近市子のように有名ではない。国際結婚にしても、昭和初期のそれは、明治期のごとく記録に残されるほど珍しくはない。洋装のデザイナーとしても、田中千代、杉野芳子、伊藤茂平、山脇敏子のように、現在でもそれぞれが設立した学校にその名を残している人達のように著名なのではない。

身内の話から伺えるマスに、筆者は、当時としてはいささか「先進的」な女性であったのであろう、という程度の印象を持ったものであった。しかし、この伯母に対して、身内の一員としての興味は、過去30年にわたって、ずっと持ち続けてきたし、それなりの調査もしてきたが、最近に至るまで彼女に関する資料は身内の話を裏付ける程度のもので、それほど多くもなかった。

マスを直接知っている身内のものは、ほとんどすでに鬼籍に入った。彼らがいまだ元気であった時に、少々の聞き取りはしたのであるが、身内とは、調査のための資料となるような情報は提供してくれないものと知った。たとえば、マスは、たぶん、読売新聞の記者であったらしい、とのことは伝えてくれたが、なぜ、いくつぐらいのときに、どのような事情で、読売の記者になったのかなどの、本来身内が一番よく知っているべきことは、何も聞いていない。読売ではどんな仕事をしていたのかなどの、調査しなければわからないことは、勿論

のことながら、身内の話題にはならない。

例えば、私の母は、マスは「銀座のモガさん」として有名であったと常々言っていたが、それが何を意味しているのか、おそらく、そう言っている母も聞いている私も「モガ」なることばの辞書的な意味以上のことは知らなかった。マスとその夫ポール・ケートと数年間生活をともにした私の母にしてこの程度しか語ることは持たなかった。その母も昨年の1月に死んだ。マスが死んだときに中学生であった私も、60歳代の半ばとなった。マスを知る身内が次々と死んでゆく中で、数年前に、何回目かの調査を思い立った。それ以前の約25年にわたる調査は遅々として進まなかったのであるが、今回は多大な成果があった。

今回の調査で、大正末から昭和初期にかけてのマスの社会的な活躍および夫ポール・ケートとその家族をめぐる国際的な交流の有様がかなり明らかになった。その理由は、インターネットとポピュラー・カルチャーの研究が進んだことにある。インターネットの検索で、おもいもかけず、「マス・ケート」は昭和5年に『洋装通』なる著書を上梓したことがわかった。こんなことは身内の誰も教えてはくれなかった。この事を知ったインターネットのサイトは、面白いことに、江戸川乱歩の蔵書を掲示しているものであり、同サイトによると、乱歩は、『洋装通』で婦人の洋服姿を研究したらしいとのことである。さらに、この『洋装通』は昭和5年2月12、13日の読売新聞で紹介されていることも、同新聞のデータベースから知った。マスという「伯母さん」が、江戸川乱歩や読売新聞を介して、昭和初期という時代に一気につながったのである。こうして、マスについて書くための調査のきっかけが出来た。

さらに、大正時代の「モガ」や「モボ」などの風俗研究、当時の新聞や婦人雑誌の書誌学的研究やデータベース化が進んでいることも知った。最近のIT化の時代動向とポピュラー・カルチャー研究の勃興のおかげで、平井満壽子あるいはマス・ケートという、当時の先進的な職業婦人について、身内の話をはるかに超えて、その社会的なあり方をより詳しく知り得ることになった。

この最近の調査から、ここに報告することの多くが明らかになった。すなわち、箇条書きにすると、（1）マスが読売新聞の記者をしていた大正後期から昭和の初期にかけて、読売新聞やいくつかの婦人雑誌に、「平井満壽子」が発表した短編小説、随筆・評論、ファッション記事、（2）「マス・ケート」とその夫のポール・ケートについて書かれた新聞や婦人雑誌記事など、さらに、（3）マス・ケートやポール・ケート、またポールの母親のエラ・スティムソン・ケートとその夫のアイザック・ウヲレス・ケートが、戦前の東京でどのような人々と交友をしていたのかを示す、主に当時の知識人による記録などである。

上記の資料に基づいて本論で述べようとすることは、（Ⅰ）大正末期から昭和初期にかけての読売新聞記者としての平井満壽子、（Ⅱ）昭和初期の国際結婚とファッション・デザイナーへの転身にかかわるマス・ケート、および（Ⅲ）マスやその夫ポールをめぐる、大正デモクラシー時代の「異文化交流」の局面である。本稿は（Ⅰ）に限る。（Ⅱ）（Ⅲ）は続稿にゆずる。

なお、煩瑣を避けるために注釈は最小限にとどめ、必要な場合にも出来るだけ本文中に挿入する。参考文献一覧を巻末に置く。引用中の漢字と仮名遣いは現在使われるものとし、漢字のルビは省略した。

読売新聞婦人記者—大正から昭和の「モダン・ガール」時代—

出生および少女時代

平井満壽は1902（明治35）年4月7日に生れた。出生地は、戸籍によれば、群馬県山田郡桐生町、父平井輔五郎、母ワスの長女である。父の輔五郎は、マスが後に述べていることによると、貿易商を営んでいて外国人との知り合いも多かったとのことである。文久元年生まれの輔五郎は若くして死んだらしく、筆者は会ったことはない。父から聞いたところでは、輔五郎は舞鶴藩の家老の家に生まれたそうである。戸籍（千葉県）によれば、輔五郎は東京下町、当時の浅草区や下谷区に住んでいた。輔五郎一家の生活圏は群馬県や千葉県ではなく、今でいう東京の都心であったようである。母ワスは千葉県の生まれで、旧姓を石橋といった。慶応3年の生まれで、戦後に95歳くらいで亡くなった。ワスは全部で10人の子供を生んだそうだが、成人したのは、マスおよびその兄の四郎、弟の尚之、義則、五郎の5人である。

長兄の四郎は、東京高等商業学校（後に東京商科大学、現一橋大学）を出て、三省堂で『コンサイス』などの英語辞書や英語教科書の編集をし、後に重役になった。研究社の『英語青年』に英語教育に関する論文を書いたり、第二次世界大戦後の国語改革運動に参加したりしたようである。マス（学歴に関しては後述）と四郎が当時としては最高の教育を受けたのに対して、弟達は、どういうわけか、たいした学歴を持っていない。一家の没落があったらしいが、詳しくは聞いたことがない。

当時の学制から見て、マスは6歳から12歳まで（明治41 - 大正3年）は尋常小学校に通ったはずである。さらに、12歳から16歳まで（大正3 - 7年）は高等女学校に通ったはずである。いずれも学校名は不詳である。マスが高等女学校を出たであろうと推測する根拠は、17、8歳ですでに新聞記者をしていたようだからである。当時の女子エリート教育の高等女学校を出ていないと新聞記者にはなれなかったであろう。後に見るように、当時の読売新聞が募集した婦人記者の学歴は、最低、高等女学校卒である。

マスは山脇高女を出たのかもしれない。そんなことを筆者は母から聞いたことがあるような気がする。山脇がその正式名称を山脇高等女学校としたのが1908（明治41）年。学校の所在地は東京の赤坂。早くも制服を洋服に定めたのが1918（大正7）年。女学生マスの時代（大正期）と生活空間（東京都心）に合致してはいる。山脇の建学の精神は「高き教養を磨き、勤労を尊ぶ」近代女性の育成であったとされている。マスが山脇で学んだかどうかにかかわらず、彼女は山脇の精神を、近代的職業婦人として受け継ぎ、生きたことに間違いはないようである。

前田愛によれば、マスが成人した大正中期から後期にかけて、高等女学校の数は約2.5倍となり、同年齢女子の約10％が高女卒となる。この時代に、これらの教育のある女性は「家父長制への隷属を強いられていた従来の家庭文化のあり方に疑問を抱き、社会的活動の可能性を模索しはじめる。」

前田が要約するような時代の流れの只中でマスが成長したことに疑いはない。だが、少女時代のマスが、具体的に、どのような家庭環境で、どのような生活をしていたのかは、残念なことにほとんど解っていない。だが、マス自身が書き残した評論2本から、ほんのわずかではあるが、彼女の少女時代を知ることが出来る。これらの評論は、ともに、マスが適齢期には嫁に行こうとする平均的な少女ではなく、若い時から、大正期の「新しい女」として経済的にも精神的にも、自立を意識していたであろうことを示唆している。

まず、「モダーン・ガールの通有性」という評論が残っている。これはマスが23歳の時（1925年）に平井満壽子名で『婦人公論』に書いたものである。その中で、マスは少女時代を回想して、いわゆる年頃になればお嫁に行くものと思っていたから、近所の小母さんが自分の母親に縁談を持ち込めば、人並みにうれしいやら、はずかしいやらであったと言う。ここまでは並みの娘の言である。ところが、その先がいささか複雑になる。そのころに結婚の申込者がいたとしてもその男の許に行こうなどとは決して思わない、とマスは付け加える。なぜかといえば、当時は男に興味を持たないくらいであるから、したがって愛など感じない。立派な申し込み者があれば、自分もそれにふさわしい価値があるのだと思い、それだけでいささかうれしく感じたのだ、と言う。結婚は恋愛によるべしという、世間がモダン・ガールに寄せる期待に応えるような、そうでないような、もって回った文章であるが、要するに、年頃にはそれ相応の娘らしい感情もあったけれども、それ相応の感情に従って嫁に行こうとは思わなかった、と言っているようだ。その理由は、通常の嫁入りはしたくなかった。なぜか？自由恋愛にあこがれた「モダン・ガール」だったのか。そうではなくて、むしろ、経済的に独立できる近代的「モダン・ガール」としての職業婦人になりたかったのであろう。

次は、17、8歳頃のことの回想であるが、これは事実として面白い。マスは、1928（昭和3）年に、同じく平井満壽子名で「胸のすくやうな快さ」という評論（随筆）を『女性』に書いた。これは自分が断髪するにいたる経緯を述べたものである。マスは、この随筆を書く9年前（大正8年）にはじめて断髪の女性を見たと言う。その場所は慶応の三田文学会の会合である。ある時、銀座裏にあるロシア人経営のカフェで三田文学会の集まりがあった。「私はまだ子供に毛の生えた位の、少し調子の外れた女の子であったから、浪花節がたりのような小島政次郎さんや、呉服屋の若旦那のような色の白いやさ男の三宅周太郎さんや、やさしいおじさんのような水木京太さん、それから例の名物男であった死んだ坂本のグレさんなどと胸をわくわくさせながら、何やらとりとめのない話を」した。マスは17、8歳のそのころには三田文学会の集まりに出ていたことになる。

マスはそこで英国帰りで、三宅周太郎言うところの、日本最初の断髪婦人を見かけた。し

かし自分は、ただものめずらしいとは思ったが、断髪しようとは思わなかった。それから1年ほどして別の女性（佐々木房。小説家、モダン・ガールといわれた。佐々木茂索夫人）の断髪を見たが、自分とはかけ離れたことのようにしか思えなかった。マス自身は、この文章を書いたときより3年前の大正14年に断髪して、「胸がすくやうな快さ」であったと言う。マスの断髪は、23歳の時であった。

ここで注意したいことは、マスの断髪よりは、むしろティーンエイジャーのマスが、三田文学会の集まりに出かけ、銀座裏のロシア人経営のカフェで、劇作家の水木京太や、そのころ新進の大衆小説家であった小島政次郎、同じく新進の劇評家であった三宅周太郎のような、マスよりは10歳あるいはそれ以上年上の文士連中と、胸をわくわくさせてとりとめのない話をしたことである。たしかに「少し調子の外れた女の子」ではあったのであろう。「グレさん」とは坂本紅蓮洞のことである。本名は易徳。明治から大正時代の文壇の名物男。慶応義塾出身で、大正14年に没。

マスが参加したのは明治43年から大正14年までの三田文学会のことである。マスの言を信ずるとすれば、このころの三田文学会は、ずいぶんとざっくばらんなものであったらしい。『三田文学』は大正15年に復刊された。この復刊時の三田文学会の会合の雰囲気を、当時、慶応義塾予科1年に入学した19歳の北原武夫が伝えている。この復刊は水上滝太郎を中心としてなされ、北原は水上の自宅（東京の麹町）で開かれた三田文学会の「水曜会」（例会であろう）に参加した。

「水上先生を筆頭に、なくなった南部修太郎氏や水木京太氏、それに久保田万太郎、小島政次郎両先生を上座に」若手作家や学生などが多数混ざって「三田独特の率直さで和やかに談笑している雰囲気は、末席にいる僕などをも妙に興奮させた。」

北原武夫は1907（明治40）年生まれ。マスより5歳ほど年下である。この文章は1926年の三田文学会の集まりのことである。マスが三田文学会に参加したのはこれより7、8年前のことである。マスが気楽に話をした水木や小島は上座に座っている。当時、マスよりは年長であった北原は声もかけてもらえないようだ。

マスの後輩の現在の読売新聞の記者は「新人文学賞超若年化」（『読売新聞』2005年10月9日朝刊）を書いている。されば、マス17歳の文学志望も、さほど奇異なことではないかもしれない。

マスの少女時代についてこれ以外の記録は知らない。しかし、その少女時代は、要するに、「少し調子の外れた女の子」が人並みの嫁入りは拒否して、若くして新聞記者になり、文学修行をして将来の経済的、精神的独立の備えをしていた、ということであろう。

婦人記者時代

1918 - 25（大正7 - 14）年の間のどこかでマスは読売新聞の記者になった。これまでのところマスの履歴を読売新聞社では確認できないが、読売新聞の記事を始めとして、その他

の雑誌記事の肩書きや内容からこのことは間違いないと思われる。私が入手した限りで、マスが一番早く活字にしたものは、平井満壽子「新春の流行」（大正12年）である。これは雑誌『住宅』に載せた和服地の流行を紹介する記事である。記事に肩書きはないが、出版社（柏書房）による著作権者名簿には「読売新聞記者」との肩書きがある。その後、読売新聞記者の肩書きで平井満壽子「恋愛の経済化」を『婦人画報』（大正15年6月号）に発表しているから、遅くとも、大正15年には読売の記者であったことが確認できる。ただ、同じくこのころには新聞記者を辞めたようである。

それでは、何時、新聞記者になったのか。『婦女界』（昭和5年3月号）の「外人と結婚した婦人記者の結婚挿話」に、マスは「元読売新聞記者」として紹介されている。マスはその記事の中で「私が読売新聞の婦人記者をしていたのは、七八年位でしたでしょう」と言っている。仮に、1926（大正15）年まで、7または8年記者をしていたとすれば、記者になったのは大正7、8年。マス16、7歳の時、ということになる。少々のずれはあるかもしれないが、大正時代の中ごろに、16、7歳の少女が新聞記者になったのである。稀有のこととは言えまいが、珍しいことではあったろう。

このように、マスは高等女学校を卒業した直後か、あるいはしばらく後に読売新聞の記者になったらしい。マスは、どのようにして記者になり、またどんな記者であったのだろうか。まず、学歴である。すでに見たように、マスの学歴については推測の域を出ない。16、7歳で記者になったとすれば、高等教育（例えば、日本女子大学など）を受けていない。したがって、高等女学校卒が最も一般的な高学歴であった当時にあって、マスがこのレベルの教育は終了したと考えて正しかろう。現に、当時の読売新聞（大正5年9月6日）は「婦人の職業」欄で、婦人記者の条件として、学歴は高等女学校卒業以上、年齢は24、5歳以上の世間的知識がある者、としている。

マスの学歴は高女卒であることは間違いないとしても、上に見るように、24、5歳はもっともながら、16、7歳の記者は若すぎないか、という疑問が残る。現に、読売新聞社は、ほとんど同時期に、自社の婦人記者募集広告（大正6年5月27日）で、「年齢30歳ぐらいで、なるべく家庭の仕事に経験ある方」を婦人部に求めている。

以上は、ともに、読売が高等女学校卒業したての若い女性を婦人記者に採用したことへの疑問を招くものであるが、他方、同じ読売の、それ以前の記事（大正4年5月27日）で、若い娘の記者志望者を紹介している。それによると、東京高等女学校3年の河村明子という生徒が、校外授業で聾唖学校を見学したので、その見聞記を読売新聞の記者が書いてくれと頼みにきた。記者に自分で書くように言われて、生徒はすらすら書いた。記者は「天の成せる婦人記者、十七歳の少女来社、記者の才能を現す」と興奮気味の記事を書き、この少女の原稿を載せている。婦人記者どころか少女記者もいたのかもしれない。十代の女性記者は、それなりの数いたらしい。たとえば、マスと同じ時期に望月百合子という女性記者が読売新聞にいた。望月は高等女学校卒業後に19歳で入社している。望月については後に触れる。

「モダン・ガール」記者時代の著作

どのようにして、マスが読売の記者になったのか？おそらく高等女学校を出て、という以上には解らない。マスが記者としてどんな記事を書いたのか、これもよく解らない。ただひとつだけマスが読売新聞に書いたと思われる記事がある。杉野芳子のドレス・メーカー女学院への訪問記事（大正15年12月22日）である。この記事に署名はないが、杉野がその自伝でマスの訪問について述べていること（後述）と一致している。その記事の中で、杉野は婦人子供服の製作は女性の手で行うべきであると主張している。この主張に、マスは深く同感したのではなかろうか。杉野みよれば、後にマスは杉野のドレメに入学し、洋裁を学んだ。

マスが記者として通常の記事をどのくらい書いたのかは解らないが、大正の末から昭和のごく初期にかけて、読売新聞に平井満壽子の署名入りで2本の短編小説（掌編）「まがい唐桟」と「浴槽」およびごく短い随筆「洋装の悲哀」が掲載された。小説2編は、ともに、江戸っ子風の、気転の利いたもので、精神のモダンさ（柔軟、垢抜け）を示している。たとえば、性的な官能が暴発する一歩手前で、するりと身をかわす男と女の姿が描かれている。

それに対して、「洋装の悲哀」は毎日、何回も「モダン・ガール」との罵声を浴びせかけられることへ腹を立て、それら下劣な男どもが「モダン・ガール」という言葉を忘れるのを待っている、と結んでいる。時代遅れな男どもへの立腹とともに、時代は我がもの、という自信もあったのであろう。いずれにしても、マス自身の気風と世間から期待された「モダン・ガール」の姿の間には相当大きな間隔があり、その間隔はマスの文体に現れているようである。

屈折せる文体

新聞記者時代のマスは、世間はもちろんのこと、自分が属するジャーナリズムからも「モダン・ガール」に見立てられて、そのような見立ての中で、原稿を書いた（あるいは、書かされた）のではなかろうか。筆者がこれまでに調べた限りでは、マスは大正の末から昭和の初めにかけていくつかの女性雑誌に10篇近くの随筆や評論を発表している。内容は恋愛、結婚、断髪、スポーツ、映画などである。すべて当時の「モダン・ガール」に結び付けられたテーマである。マスはこれらのテーマで執筆しながら、世間の大騒ぎの対象とは異なる「新しい女性」の近代的な精神を掬いだし、社会的に位置付けようとしていたようだ。たとえばモダン・ガールの恋愛という大衆的な期待と、近代女性としての社会的な先進性の探求のあいだで葛藤していたかのごとくに、この時代のマスの文章のほとんどは、ある種の屈折を示している。

マスに貼り付けられたらしい「モダン・ガール」とは何か。大正の末から昭和の始めにかけて、これは多々論じられた。「モダン・ガール」は毀誉褒貶の的であった。いつの時代でもそうであろうが、人々は新現象の表面を見て貶し、そこに革新的な思想の継承を見て、褒め称える。「モダン・ガール」も同じことであろう。西洋かぶれのフラッパーと貶し、逆に、

一時代前の平塚らいてう等の「新しい女」と共通するフェミニズムの精神を見出しては、褒める。

大正の末から昭和の始めにかけて「モダン・ガール」は種々論じられた。面白いことに当時の「モダニズム」が今日また論じられている。ここでは大宅壮一や新居格などの大正・昭和のモダン・ガール論ではなく、今日のそれを見よう。『モダン都市文学2「モダンガールの誘惑」』の編者である鈴木貞美は「モダン・ガールは、新しい都市に咲いた新しい花。1920年代の”新しい女たち”」として、「モダン・ガール」に断髪、西洋ファッション、新しい職業、スポーツ、音楽・シネマ・絵画、恋愛、自由・賢明などの単語を結び付けている。

鈴木の「モダン・ガール」特性を基準とすると、マスはそれにどの程度当てはまるのか。マスは1920年代の新しい女であることを自認し、洋装をはじめ西洋風の生活を子供の時から受け入れたという。大人になってからは断髪をして、快いと感じた。このことを述べる文章に屈折はない。

しかし、風俗としてのスポーツ、音楽などから恋愛までを語る文章には、明らかな屈折が読み取れる。マスはスポーツやシネマについて随筆風の文章をいくつか書いた。だが、これらはあまり出来のよくない風刺文のように見える。大学野球やシネマに夢中になる「モダン・ガール」という一般的なイメージへの風刺である。恋愛、はどうか。マスは自分の国際結婚を恋愛ではなく見合いであると繰り返し述べている。恋愛結婚には反対であるとさえ言っている。「モダン・ガール＝恋愛」というイメージを打ち消そうとしているようにも見える。

だが、マスは、鈴木の挙げる特性のうち、自由と賢明をきわめて尊重したようだ。彼女は女の子に憧れられたかどうかは知らないが、男心は大いに惑わしたようではある。マスは「惑わされた」男どもに、日に何度もモダン・ガールと揶揄され、ののしられたことは確かであろう。すでに見たように、自分でもそのことを腹立たしげに書いている。風俗としての「モダン・ガール」に反発し、近代的な精神の担い手としてのそれにアイデンティティーを見出し、両者を混同する頭の古い男のみならず、フラッパーの女どもにも義憤を覚えたのであろう。

風俗としてのモダン・ガールと近代精神の発露としてのそれとの間には矛盾があり、マスは、作品において、そして、おそらくは実生活においても、いわば、前者の風体をして、後者の精神を描き出すという、ある種の葛藤を抱えていたようだ。その葛藤が、屈折した文体を作り出しているのであろう。この屈折は、たとえば、1926（大正15）年6月号の『婦人画報』に見られる。この号に「読売新聞記者」の肩書きのある平井満壽子は「恋愛の経済化」を書き、小説家の吉屋信子は「或る青年の話」を書いた。『婦人画報』は彼女たち「モダン・ガール」に、モダン・ボーイと恋愛といったテーマで書くことを要求したのであろう。マスは、モダン・ボーイは女性にトコトン入れあげないから、女もそのつもりで男に対してわがままをしないがよいとの趣旨のことを述べて、男女ともに計算づくの恋愛をするから、

恋愛の「経済化」が進み「ああ世の中はますます面白くなってくるものである」と言う。意味ははっきりしないが、ある種の屈折した知的気取りだけはよく見える文章である。それに対して、吉屋信子は与えられた、この愚にもつかぬテーマを、いわば手玉にとっている。「私はモダン・ガールとかモダン・ボーイとかモダン・英和辞典とか」についてはまったく無知であるが、原稿の催促が厳しいから、白紙の答案を差し出すつもりで書く、と平気で言うのである。マスは世間の要求するつまらぬテーマにまじめに取り組み、それなりの近代的な合理性を、無理にでも、引き出そうとしているようである。しかし、小説家の吉屋信子は、愚劣なテーマを「迂回」しながら、それについての文章を書くことも知っていたように見える。

「モダン・ガール」の近代精神

マスは個人としての精神的かつ経済的自由をきわめて重視したようである。また、この自由を支える賢明さ（頭の良さ）を重視した。彼女はこれらを女だけに要求するのではなく、男にも要求した。マスが残した随筆や評論を詳しく読むと、これらに出てくるキーワードは「自覚」「計算」「聡明」「近代的」などであることに気がつく。これらのキーワードは、不自由、盲目、我儘などと対立する。マスは、たとえば、結婚について、親が決めた結婚を、当然、否定するが、また熱烈な恋愛結婚も否定する。ともに、盲目的で、「自覚的な計算」が伴わないからだ。マスの考えでは、一個の個性を持った近代女性が結婚を考える時、恋愛感情を超えた打算的な条件が付せられる。たとえば、相手が人格者であること、教養、健康、愉快な共同生活が見込まれること、など。これらを考えると結婚する気が失せて、さびしくなる。それでも仕方がない。なぜなら「これは自覚せるモダーン・ガールの通有性な悩みであろうと、私は考える」から。女性が自分の意志を通せず、経済的独立が出来なければ、「恋愛の自由さえも日本の家庭では与えないのである」（「モダーン・ガールの通有性」）。

自覚せる近代的なモダン・ガールは、自立・自由な意思と経済的な独立を手に入れるゆえに、親が決めた結婚はもちろん、盲目的な恋愛による結婚も出来ない。要するに、近代的な女性が、同様に近代的な男性と結婚することは難しい。しかし、それは女性が近代的精神と経済的な独立を獲得することに対して支払わざるを得ない対価である。

先に少々触れたことであるが、「自覚的な計算」という点で、モダン・ボーイはその「計算高さ」ゆえに、一応、評価される。近代的男性であるモダン・ボーイは、女性に対して盲目的な恋愛をしない。「ラブをしても、時々心の計算をしてみて、自分のほうが損だと思えば、さっさと引き上げてゆく」とマスは述べる。だから、女がいかに男を愛していると思っても、いつ逃げて行くかわからない。このような心の損得勘定で成り立つ男女関係を、マスは、恋愛の経済化（盲目的な恋愛という不経済を免れる、との意であろう）と呼ぶ。そしてこのような時代が到来したことに「ああ世の中はますます面白くなってくるものである」と言う（「恋愛の経済化」）。

これは「近代化」する世の中への賞賛よりは慨嘆に聞こえる。マスは、自分が分析した、モボとモガの「心の計算」の上の男女関係を、賞賛も否定も出来ないように見える。マスがなし得た事は、ただ、家制度と恋愛の不自由さを、「心の計算」という「自由」に置き換えただけである。時代の近代性を、無理をしてでも、引き出そうとしているようである。

次は、男と女のもたれあいのわがままから、フェミニストのわがままへの転換である。マスによれば、昔から男は我儘なものと決まっていたが、最近では女も我儘になってきた。我儘で男を困らす女も出てきた。しかしこれからは、女の我儘も昔のようにただ男を困らすという程度を超えて「男の意思を、女の力によって動かすまでに進んでゆくと私は思う」(「世の男子方よ」)。

ここには、『青鞜』に集まった平塚らいてうらの明治期の「新しい女」の気魄が感じられないでもない。しかし、マスはどのようにして「男の意思を、女の力によって動かす」のかの方法は考えなかったらしい。この方法は、「女の我儘」によらないとすると、フェミニスト社会運動によるか個人としての男女間の合意によるか、そのどちらかしかない。マスが社会運動に関わった証拠は、目下のところ、ない。マスの国際結婚は、少なくともマス自身の目には、近代的な個人主義志向の結果であったのだろう。

再び、屈折せる文体

上に述べた「恋愛の経済化」と「世の男子方よ」は、繰り返しになるが、ある種の屈折した文体を示している。「モダーン・ガールの通有性」が、近代女性の結婚という問題に対して、女性の独立ゆえの独身の確率の高さという、ある解答を示したのに対して、これら2編の評論はいわば奥歯に物が挟まったような、もどかしさを感じさせる。このもどかしさは以下に論ずる、マスの著作のほとんどすべてに共通する。

まず、当時はやったモダン・ガールの大学野球観戦。マスは次のように言う。近代の女性が野球を見に行くのは、野球が頭の働きを要する聡明な運動だからである。野球は「運動のうちで最も近代的の運動と言う事が出来よう。――などと、筆に任せて書いてしまったが、天下の野球選手諸君よ、けして自惚れ給う勿れ。」なぜかというに、聡明な近代女性は野球を見に行っても「熱心に眺めて心をおどらせると言うような、そんな聡明なことはしないから。」ただカクテルでも飲みながら友達との話の種にするだけだから(「現代女性の野球観」)。ここでは「聡明」という単語が、種々な意味で使われている。野球は「聡明な運動」である、は直截な表現で意味は明白である。野球を見に行く近代の女性は聡明である、も同様に明白である。群れをなして球場に行くモダン・ガールは流行に従っているだけで「聡明」ではない、これも意味が通る。彼女たちが胸を躍らせて熱心に観戦することは「聡明」である。この「聡明」は、反語としてならば意味が通る。しかし、近代女性がカクテルのつまみに野球の話をすることは「聡明」と呼べる行為であろうか?カクテルを飲み、話の種に野球の話をするモダーン・ガールがさほど「聡明」だとは思えない。こんなことを「聡明」としか呼べなかっ

たところに、マスの「モダン・ガール」論評の限界が見える。近代女性の精神性を、妙に斜に構えて伺っているところに、屈折した文章が生じるのであろう。

次は、妻に対して貞操を守らない夫と離婚すべきであるかどうか。これはモダン・ガールの恋愛とともに、当時の婦人雑誌の流行のテーマであった。マスは、妻が離婚することによってだらしない男子を目覚めさせろ、と一応は言う。だが、離婚は至難のこと、また不和になってでも一緒の生活をするのも苦痛なことである。だから「自覚せる離婚は人生の手術として、適当に行われたら、健康な人間生活が続けられると私は思う」と判断する（「人生の手術として」）。

これは、マスが25歳の時の文章である。トピックは男子の貞操。女が貞操を守らなければ離婚される。同様に貞操を守らない男を妻から離婚すべきか、というテーマで書くよう依頼されたのであろう。この答はイエスかノーしかない。いずれにしてもその理由をどうつけるかだけが、書き手の課題である。マスの文章は、第一、イエス、ノーの踏ん切りがついていない。したがって、「人生の手術」などという「こなれない」解答を出さざるを得ない。離婚はこじれた夫婦関係の手術にはなりうるが、「切っても切れない夫婦共通の人生」でも考えない限り、「人生の手術」にはなりえないであろう。マスにとって、恋愛や夫婦などの男と女の問題はあまり得意ではなかったのであろう。あるいは、この種のテーマを適当にあしらうには、マスはまじめすぎたのかもしれない。

同じことは「友達という言葉」にも当てはまる。これも、男女間に友情は成り立つかという問題への解答であろう。マスの答は「成り立たない」である。なぜならば、「私は男とは熱烈な恋愛に入るか、さもなければ何百人、何千人の男に対しても、同じ程度の隣人としての愛を持って話しかける、非常に責任のない気持ちを持つだけ」で、友情はもてない。これも訳の解らない文章である。通常の男女間の付き合いを「友情」と呼ぶことを拒んだからといって、それを「愛」と呼ばなければならない理由はない。「隣人としての愛」などという言葉がモダンに響いたのかもしれないが、男女間のすべての関係を恋愛や愛という言葉で表さねばならないというある種の強迫観念が感じられる。やはり、マスは恋愛論や人生論などは嫌いだったのであろう。

最後に、マスが発表した一番長い文章に、ほんの少々ではあるが触れておく。これは『女性』（昭和2年6月号）に載った「シネマ漫話」で、5ページにわたる。当時流行の西洋映画を見に行くモダン婦人やモダン・ガールの女学生と不良外人の「交流」を風刺したつもりの文章であるが、何ともしまらないもので「漫話」と呼ぶほどには面白くない。性急な推測であるが、マスは、このあたりで文士となることをあきらめたのではあるまいか。

上に見た多少とも屈折した恋愛論や人生論に対して、自分が断髪にいたったことを書いた「胸のすくやうな快さ」は、実に素直な、それこそ「快い」文章である。切り落とした「黒い髪の毛は蛇の死骸のように紙の上に冷たくうねっていた」などの官能的な表現がある。マスはこの種の官能性に近代性を見ていたようである。たとえば、断髪をした女の首から頭に

「近代的な感覚的な官能的な美」があり、日本髪の静の美に対して「断髪の美は嵐のような動きのあるそして複雑な美だ、これは確かに近代人の美でなければならない」と言っている。これは1928（昭和3）年に書かれた文であるが、マスは、翌4年から洋装記事を書き始める。随筆や評論に比べて、洋装記事は、実に伸び伸びとした文章である。

マスが断髪、洋装に近代的な美を見たことは、後にファッション・デザイナーとなることと関係するであろう。

読売新聞社

マスが近代女性としてのあり方を学び、かつ、それを育てていったのは、主に、その職場であった読売新聞社であったことは間違いなかろう。当時の読売新聞を近代女性のあり方との関連で瞥見する。

「よみうり婦人付録」

『読売新聞百年史』（読売新聞社、昭和51年11月）によれば、大正時代の青鞜社の活躍などに見られる婦人問題への関心の高まりに沿って、読売新聞は大正3年10月に日本で最初の婦人のための「婦人付録」（1ページ全面）を編集した。編集主任は小橋三四子。与謝野晶子と田村俊子が入社して、小橋を援護した。「婦人付録」は発刊第1日目のトップ記事「婦人と時勢」で「今の婦人のまえに提出された大小の問題は数限りなくある」が、それらの問題の意味を「十分に理解し、処置しつつ進んでゆくことの出来る婦人は幸福である。さらにそういう婦人を持っている社会もまた幸福である」として、「婦人付録」創刊の意義を明らかにした（p.254）。

マスが読売新聞に入社したかしないかという頃の大正8年に、「婦人付録」は慶応大学教授稲垣末松の談話を載せた。稲垣は「良妻賢母という幽霊に魅せられて女子教育を誤ってはならない。今日この幽霊退治が大切なのだ」と主張した。第一次大戦後の物価騰貴は、婦人に職業か家庭かの選択をせまり、女子の職業教育か良妻賢母教育かをめぐる女子教育論が盛んになった（『読売新聞百年史』、p.271）。

上述のようないわば進歩的な読売新聞のあり方は、近代女性としてのマスのあり方に影響を与えたであろう。しかし、当時の読売新聞は、全体として、必ずしも近代的であったとも言えないようである。明治時代の末から大正時代全般にかけての読売新聞社のことは、上司小剣『U新聞年代記』や子母沢寛『二丁目の角の物語』に文学作品として描かれている。これらを見る限り、当時の読売新聞が、子供の時から西洋的なものを歓迎したというマスが慣れ親しめるほどのモダンさを持ちあわせてはいなかったように思われる。

千葉亀雄

千葉亀雄（1878 - 1935年）は明治末から昭和の初めにかけて活躍したジャーナリストで

ある。初めは雑誌記者として出発し、後に『国民新聞』や『時事新報』の社会部長となり、1919（大正8）年に読売新聞社に移り、社会部長兼文芸部長に就任し婦人評論を読売紙上に連載した。1926（大正15）年に読売新聞を退社。その後文学評論の執筆をしながら、立教大学、日本大学で教鞭をとる（「千葉亀雄略年譜」『千葉亀雄著作集第5巻』ゆまに書房、平成3、pp.350-355）。

千葉はマスが読売新聞に在籍していた期間のほとんどにおいて、彼女の上司であったと思われる。『千葉亀雄著作集第3巻』（ゆまに書房、平成3）にある「婦人記者の謎」（pp.77-88）に、千葉は日本の婦人記者として羽仁もと子や神近市子をはじめ多くの名前を挙げ、その中には、以下に見るように、「読売新聞の」平井増子とある。これはおそらくマスのことであろう。解題によれば「婦人記者の謎」は1925年（大正14）発行の「新聞十六講」に入れられたものである。この年には、すでに見たように、マスも千葉と共に読売新聞に在籍していた。「増子」が「満壽子」（マス）であるとすれば、マスは上司千葉の目にどう映ったのであろうか。

千葉の述べるところによれば、「（後に文芸や思想の分野に入っていった婦人記者に対して）いわゆる社会部記者として、男性に劣らぬ人生興味の追求に大胆な活躍と自在なペンを持った人々には古くは『神戸新聞』の坂井一紅、『読売新聞』の石島菊枝、平井増子、もっといろいろな意味で大きな振幅を持った『大阪朝日』の北村兼子嬢がある（p.79）。」

マスを含めた当時の婦人記者の仕事を知るためには、千葉がここで述べていることは抽象的に過ぎる。マスが、千葉がここに述べているような人生を追求した社会部記者であったとしたら、その痕跡はどこにあるのだろうか。すでに見たマスの文学的文筆活動を、千葉は「男性に劣らぬ人生興味の追求に大胆な活躍と自在なペン」をもってしたと言ったのだろうか。そうとは信じられない。

千葉が言わんとすることを、「平井増子」以外の記者に見ようとするが、坂井については調べがつかない。石島については次のことのみを知っている。石島は『婦人公論』（1927－昭和2－年1月号）に、マスとともに、短文を書いている。当時の婦人作家に年頭の思いを綴らせた特集のようだ。この記事で、石島は、モダン・ガールの合理性を嘲笑する「古い」女房を自認した。ちなみに、同号で、マスは心の底から「笑ひたい」と書いた。

北村については、その自伝からかなりのことがわかるので少々のことを述べる。北村兼子は1903（明治36）年大阪に生まれる。マスより1歳年下である。北村は梅田高等女学校、大阪外語学校を経て関西大学法律科に学ぶ。22才の春（1925－大正14－年）、関西大学在学中に大阪朝日新聞社に入社。記者の傍ら文筆活動を続ける。昭和2年に同社を退社。その後婦人運動家として国際的な活躍をするが、1931（昭和6）年に27歳で死亡。

北村は約2年の記者生活の後で、当時の女性記者が受けた男社会の差別に抗議して、記者を止めた。北村のその後は、千葉の言うように、「大きな振幅を持った」と言える。だが、千葉がここで北村の名を上げたのは1925年の著述においてであって、その年は、北村が記

者になった年であるから、「大きな振幅」とは、当然、北村の昭和に入ってからの上述の活躍を指すものではない。すると、「大きな振幅」とは、記者になる前の学歴のことか、あるいは、短期間の記者生活の間にそれを示す出来事があったのか。北村の自伝からは、それが何であるかはわからない。北村にしても、後に触れる望月百合子にしても、婦人記者生活は短い。北村は2年、望月やマスは7、8年である。

ここでは、「平井増子」は、千葉が述べるような社会部記者であり、平井満壽子の誤植であることを願うことにしよう。されば、さらにマスについて調べを進めればそれなりの「振幅」が現れるかもしれない。

千葉亀雄はフェミニストとして女性論をたくさん書いたが、それを読むと、千葉はマスにかなり大きな影響を与えたのではないかと思われる。千葉はマスを記者として育てようとしたのではないかとさえ思われる。両者が共通して強調する項目はいくつもある。たとえば「恋愛と貞操」「働く女性」「女性と職業」、さらには「女性の男性化、男性の女性化」などである。これらは当時のジャーナリズムの一般的なトピックであったろう。したがって、千葉とマスの共通性も、その一般性によるところが大きいのであろうが、最後の「女性の男性化、男性の女性化」は、少々の対比を示している。

千葉は男性の女性化の傾向の原因を「アアサア・ボンソンピイ」氏の論から（1）「それは女性獲得の市場が、もっとも自由に公開された時代の産物である」とし、また、「バートランド・ラッセル夫人」を引用して（2）女性の勢力が盛んになった時代に、必ず男性に起こる変形だと断じられる」とする（『千葉亀雄集第3巻』「女性の男性化、男性の女性化」、pp.505-520）。さらに、千葉は男性と女性のあるべき「原理」が定められるまでは、女性の男性化と男性の女性化を、肯定とも否定とも評価できないと、なんとも面白みのない判断をしている。

マスは「恋愛の経済化」で「モダン・ボーイ」について論じ、「モダン・ボーイ」の女性に対する「やさしさ」を、女性化した男性の、男性化した女性に対する必然的な態度であると述べた。マスはこれを恋愛の経済化と呼び、千葉は女性獲得の市場の自由な公開と呼んだのであろう。しかしマスは千葉よりもはるかに女性化した男性に批判的であった。マスは女性化したモダン・ボーイの、女性に対する態度を、どこででも「一緒になる限り美しき女に対する、ネジをゆるめた水道のように、出しっぱなしの恋情であっては、心細いことこの上もない」と皮肉っている。さらに、男が女に対して命をかけた恋愛など出来ないのは「経済的関係」が与かっているのであって、たった一人の女を、死ぬほど思うというような不経済な恋愛をモダン・ボーイはしない、とマスは揶揄している。

マスは「恋愛の経済化」に走るモダン・ボーイやモダン・ガールを感情的に否定しているのである。言い換えれば、マスが望んだ恋愛はモダンではない、「この人でなければと、燃えるようなラブをする」男の伝説的な、不経済な恋愛であったようだ。大時代的な恋愛＝ラブ論とでも看做そうか。

千葉亀雄の部下であった石島菊枝や平井増子などの若い婦人記者は、千葉の説く、西洋仕込みの男性論や女性論を、眉につばをつけて聞いていたのではなかろうか。ついには、千葉の評論家振りに反発して、石島はモダン・ガールならぬ古い女房を自認し、マスは不経済恋愛を懐かしんだ、と想像してみるのも一興である。

以上に、千葉亀雄というインテリ・フェミニストの「客観的」男性論、女性論と、その客観性に疑いを覚えたかもしれない部下の若い女性記者の「体験的」女性論、男性論を対比的に見た。「理解ある」男性を上司に持った、先進的な女性記者でもその職場は必ずしも居心地の良いものではなかったかもしれない。このことは、次に見る望月百合子について、はっきり見て取れる。

望月百合子

マスと同じころにやはり読売新聞の記者をしていた若い女性に望月百合子がいる。自伝『限りない自由を生きて—望月百合子集』（ドメス出版、1988）によると、望月は1900（明治33）年山梨県甲府に生まれた。マスより2歳年上である。1914（大正3）年東京市ヶ谷の成女高等女学校に入学するも結核のために休学。その後復学して、1919（大正8）年3月卒業。同年6月、19歳の時に読売新聞入社。婦人部記者として約1年半婦人欄を担当。このときの婦人部長はクリスチャンの松本雲舟。望月によれば、この時代の読売の記者は整理部まで含めて全部で30人ぐらいの小世帯であった。

先輩記者は岡田松枝、山口たか子、百瀬静枝の女性たちと、他に年配の男性。岡田はベテランで堅実な人。山口は津田塾を出た、しっかりしてしとやかなお嬢さん。そして、百瀬は着るものも動きも派手な人、とは望月の言である。ここにマスの名は出てこない。

望月の入社から3ヵ月後に、読売新聞の幹部が変わり、婦人部長は社会主義作家の安成二郎となった。望月はそのもとで、名流婦人や学者、文学者の訪問記事を書いた。特に有島武郎をよく訪ねた。

望月は読売に入社した19歳の時に、マスが、その断髪姿を見かけたことのある大橋（佐々木）房（前出）と一緒に、銀座のフランス人経営の美容室で断髪をして、麹町の洋服屋でワンピースを仕立て、下着と絹の靴下は横浜の山下町まで買いに行った。望月にしろ大橋にしろ、世間の指弾を浴びたようであるが、以後二人とも断髪、洋装を通して、職業婦人としての矜持を保った。

1919－21（大正8－10）年にかけて女性解放運動が盛んになり、19年末には、平塚らいてう、市川房枝らが、女性の政治的権利を求めて「新婦人協会」を作り、21年春には、堺真柄、伊藤野枝、山川菊枝らが女性だけの社会主義者グループ「赤瀾会」を結成した。このような女性運動の隆盛の中で、望月の仕事は男性記者の命に従い、訪問記事の原稿を出すことであった。望月は21年（大正10）3月に読売新聞を退社した。退社後すぐに早稲田大学哲学科聴講生（第1回生）となった。さらに、農商務省留学生試験に合格。「はちみつの研究」

をテーマに3年間のフランス留学が認められた。11月、渡欧するアナキストの石川三四郎に同行して渡仏。アリアンス・フランセーズでフランス語を学びソルボンヌ大学で西洋史を学ぶ。帰国してからは、翻訳、評論、社会運動にアナキストの立場から関わった。

以上に、大正期に婦人問題に関して先進的な反応を示した読売新聞社を巡って、当時の先進的な婦人記者が、読売に限らず、所属する新聞社に必ずしも満足をせず、数年の記者生活の後に、文学や思想を専門にし、あるいは社会運動家となっていったことを見た。マスは社会運動には入らず、またいささかの志を持った文士生活もあきらめ、洋装・洋裁の世界に入ることに、今の言葉でいえば自分のアイデンティティーを見つけたと言えるのであろう。

婦人記者からドレス・メーカーへ

マスが読売新聞の記者をやめてドレス・メーカーに転身したのは昭和の初めであるが、そのいきさつについては次の杉野芳子の記録である程度は解る。マスは、1926（大正15）年に読売新聞の記者として取材のために、当時も現在も東京の目黒にあるドレス・メーカー女学院（現、杉野服飾大学）の創立者である杉野芳子を白金三光町の自宅兼学校に訪ねた。杉野はその自伝『炎のごとく』（pp.78-80）でこの訪問のことを以下のように振り返えっている。「（大正15年の）そんな或る日のこと、まるで外人かと見まがうほどに背の高い、若くて美しい、洋装で断髪のご婦人が私たちの教室を訪ねていらっしゃいました。読売新聞学芸部の記者で、平井マスさんとおっしゃる方。」

こうして杉野はマスと知り合い、「これがきっかけとなって、まもなく私は、読売新聞の婦人欄に週一回ぐらいずつ、半年近くにわたって洋裁講座を連載することになったのです。」杉野は第1回の洋裁講座の記事の写真を、自伝のこの箇所に載せている。したがって杉野の回想は、事実として信ずるに足りる。また、先に見たように当時の読売新聞にマスの記事と思われる、杉野訪問記がある。杉野によれば、マスは、「私もいつまでも新聞記者はできないし、将来のことを考えておきたいから」と言って杉野の学校ドレメへ生徒として入学した。さらに、杉野によれば、マスは「卒業後、銀座にお店を出しているとき、慶応大学の先生をしていらしたアメリカ人のポール・ケートさんと結婚して渡米され、二年たって帰国後は、白木屋デパートのデザイナーをしたり、マス・ケート・ファッションスクールを創立したりして、初期の洋装界のために活躍されたのですが、若くして他界されたのが惜しまれます」。続けて、杉野は、マス・ケートを「華やかな、それでいてはかないものを感じさせて、私の人生を流星のように通りすぎて行った忘れられない方です」と振り返えっている。

高名な服飾デザイナーである杉野芳子女史の回想は、マスの身内である筆者には有難すぎるほどの内容である。しかし、二つのことが、依然として、解らない。第一に、マスは、なぜ、いつまでも新聞記者は出来ないと考えたのか。第二に、記者に代わる職業が、なぜ、洋裁であったのか。これらの疑問に直接答えられるだけの資料は、目下のところ無い。

参考文献

(1)平井満壽子（マス・ケート）の著作（発表年代順）

平井満壽子「新春の流行」雑誌『住宅』第8巻1号（大正12年1月）、pp.38-39。

平井満壽子「モダーン・ガールの通有性」『婦人公論』1925(大正14)年3月号、pp.40-41。

平井満壽子「恋愛の経済化」『婦人画報』1926(大正15)年6月号、pp.91-94。

平井満壽子「まがい唐桟」『読売新聞』1926(大正15)年7月19日夕刊。

平井満壽子「笑ひたい」『婦人公論』1927(昭和2)年1月号、pp.153-154。

平井満壽子「浴槽」『読売新聞』1927(昭和2)年2月14日夕刊。

平井満壽子「洋装の悲哀」『読売新聞』1927(昭和2)年7月25日朝刊。

平井満壽子「世の男子方よ」『女性』1927(昭和2)年4月号、pp.267-269。

平井満壽子「現代女性の野球観」『女性』1927(昭和2)年4月号、pp.351-352。

平井満壽子「シネマ漫話」『女性』1927(昭和2)年6月号、pp.243-247。

平井満壽子「人生の手術として」『女性』1927(昭和2)年9月号、pp.111-114。

平井満壽子「胸のすくやうな快さ」『女性』1928(昭和3)年3月号、pp.147-149。

平井満壽子「友達といふ言葉」『婦人公論』1928(昭和3)年9月号、pp.40-42。

ミセス・ケート「始めて洋装する人々へ」『婦人公論』1929(昭和4)年4月号、pp.181-185。

マス・ケート『洋装通』四六書院、昭和5年。

(2)その他（著者名50音順）

石島菊枝「非現代的女房」『婦人公論』1927(昭和2)年1月号、p.154。

井出文子・江刺昭子『大正デモクラシーと女性』合同出版、1977。

うらべ・まこと『流行うらがえ史—モンペからミニ・スカートまで』文化出版局、昭和57年（改定第1刷）。

海野弘『モダンガールの肖像—1920年代を彩った女たち』文化出版局、1985。

江刺昭子『女のくせに—草分けの女性新聞記者たち』文化出版局、1983。

北原武夫「学生時代の『三田文学』」『北原武夫文学全集第5巻』講談社、昭和50年、pp.65-66。

小山騰『国際結婚第一号—明治人たちの雑婚事始』講談社、1995。

今和次郎『今和次郎集第7巻』ドメス出版、1972。

斉藤美奈子『モダン・ガール論—女の子には出世の道が二つある』マガジンハウス、2000。

Sato, Barbara. *The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Women in Interwar Japan.* Durham and London; Duke University Press, 2003.

杉野芳子『炎のごとく』日本図書センター、1997。

鈴木貞美編『モダン都市文学2「モダンガールの誘惑」』平凡社、1989。

千葉亀雄『千葉亀雄著作集第三巻』ゆまに書房、平成3。

千葉亀雄『千葉亀雄著作集第五巻』ゆまに書房、平成3。

平井昌男『国語国字問題の歴史』（安田敏朗解説）、三元社、1998。

富士子「外人と結婚した婦人記者の結婚挿話」『婦女界』1930年3月号、pp.245-48。

前田愛「大正後期通俗小説の展開—婦人雑誌の読者層—」『前田愛著作集第二巻』筑摩書房、1989、p.157。

望月百合子『限りない自由を生きて—望月百合子集』ドメス出版、1988。

森本伊都子『国際結婚の誕生』新曜社、2001。

弥生図書館・内田静枝編『女學生手帳―大正・昭和乙女らいふ』河出書房新社、2005。
吉屋信子「或る青年の話」『婦人画報』1926（大正15）年6月号、p.94。
『読売新聞』「婦人の職業」1916年9月6日。
『読売新聞』「婦人記者募集広告」1917年5月27日。
『読売新聞』「婦人服は婦人の手で―新帰朝の杉野学士婦人が大抱負で裁縫学院を開く」1926年12月22日。
『読売新聞』「通が書卸した十種の叢書（上）」1930年2月12日朝刊。
『読売新聞』「通が書卸した十種の叢書（下）」1930年2月13日朝刊。
私たちの歴史を綴る会/編・著『婦人雑誌からみた一九三〇年代』同時代社、1987。